

好酸球性筋膜炎の病態解明を目指した、マウス筋膜炎モデル

研究分担者	山本俊幸	福島県立医科大学医学部皮膚科	教授
研究分担者	浅野善英	東京大学医学部附属病院皮膚科	准教授
研究分担者	石川 治	群馬大学大学院医学系研究科皮膚科学	教授
研究分担者	神人正寿	和歌山県立医科大学医学部皮膚科	教授
研究分担者	竹原和彦	金沢大学医薬保健研究域医学系皮膚分子病態学	教授
研究分担者	長谷川稔	福井大学医学部感覚運動医学講座皮膚科学	教授
研究分担者	藤本 学	筑波大学医学医療系皮膚科	教授
研究分担者	牧野貴充	熊本大学医学部附属病院皮膚科・形成再建科	講師
協力者	佐藤伸一	東京大学医学部附属病院皮膚科	教授
研究代表者	尹 浩信	熊本大学大学院生命科学研究部皮膚病態治療再建学分野	教授

研究要旨

好酸球性筋膜炎は、全身性強皮症の類縁疾患であるが、その頻度はずっと少ない希少疾患である。そのため、疫学データや、病態解析に関する報告も極めて少ない。本研究では、好酸球性筋膜炎の病態解明の糸口になる可能性を期待し、マウスにブレオマイシンを局所投与することで筋膜炎を誘発した。コントロールのPBS投与と比較し、ブレオマイシンの皮下投与は、筋膜炎の明らかな肥厚と炎症細胞浸潤が確認された。

A. 研究目的

好酸球性筋膜炎の病態は全く不明である。その一因として、動物モデルがないことが挙げられる。本研究では、マウス筋膜炎モデルの作成を試みた。

B. 研究方法

C3H/HeJ マウス(6週齢、雌)(n=5)の背部を剃毛後、ブレオマイシン(500 µg/ml)を100µl筋膜炎の深さまで局所投与を週5回、3週間繰り返し、組織学的に検討した。

C. 研究結果

HE染色像を図1に示す。コントロールのPBS投与群では、筋膜炎の肥厚はみられないのに対し、ブレオマイシン投与群では、筋膜炎の肥厚に加え、単核球浸潤がみられた。好酸球浸潤はごくわずかにしかみられなかった。

D. 考察

今回は組織学的な検討しか施行していないが、マウスにブレオマイシン処理することにより

筋膜の肥厚と炎症細胞浸潤が惹起された。しかし好酸球浸潤はごくわずかしかみられなかった。本モデルがヒトの好酸球性筋膜炎をどの程度反映しうるかは未定で、今後検討の検討課題である。

E. 結 論

マウス筋膜炎モデルとなりうる可能性を示した。

G. 研究発表

- | | |
|---------|----|
| 1. 論文発表 | なし |
| 2. 学会発表 | なし |

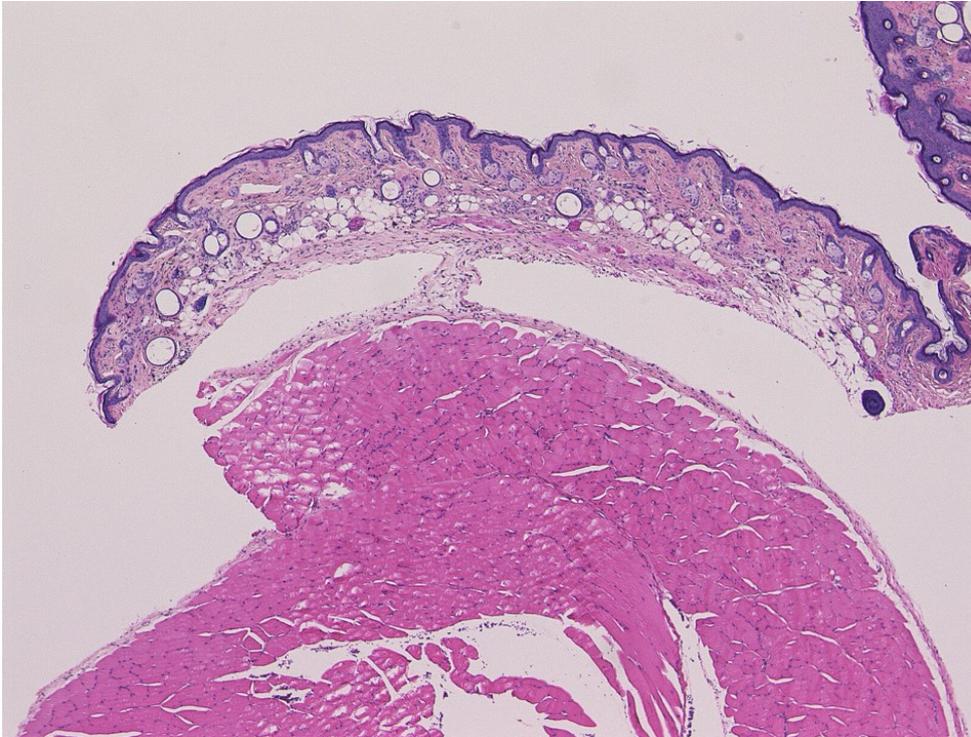
H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

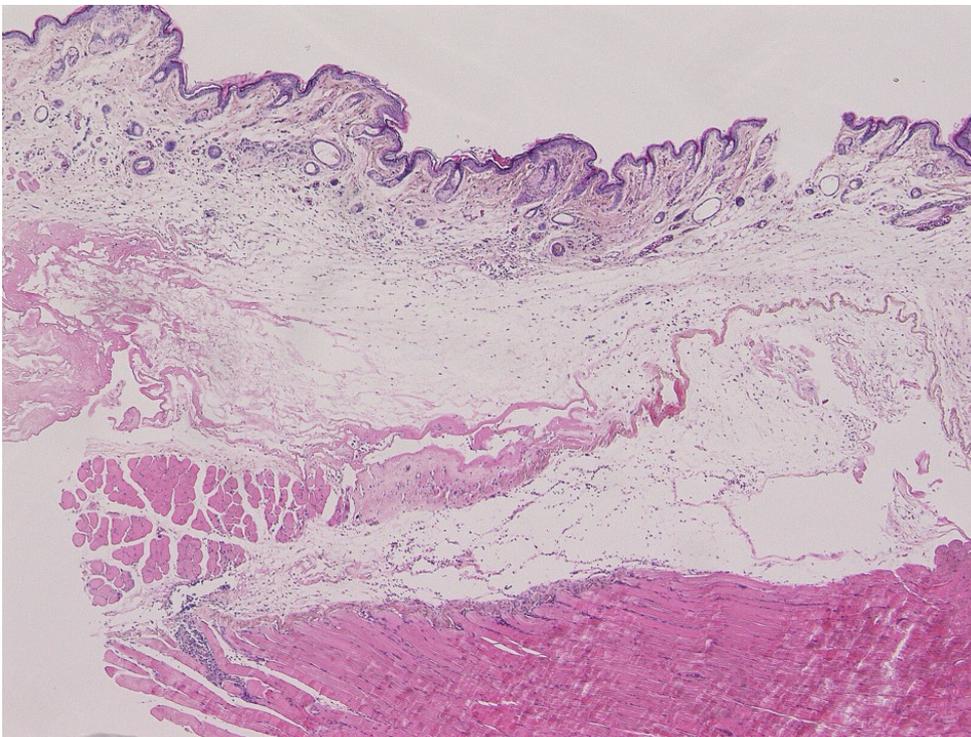
- | | |
|-----------|----|
| 1. 特許取得 | なし |
| 2. 実用新案登録 | なし |
| 3. その他 | なし |

図1 マウス病理組織H E 染色像

(a) PBS 投与群



(b) ブレオマイシン投与群



(c) 拡大像

